雑説

名前（　　）　日づけ（　／　）　できた数（　／28）

使い方　書き下し文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この文章の山は部分否定「常には有らず」、反語「安くんぞ〜んや」、「食」「見」の読み分け、そして伯楽と千里の馬のたとえ**です。

あらすじ＝世に伯楽がいて、初めて千里の馬は千里の馬として世に知られる。千里の馬はいつの世にもいるが、伯楽はいつもいるとは限らない。だから名馬も、身分の低い使用人に粗末に扱われ、並の馬と首を並べて馬小屋で死んでいく。千里の馬は一度に粟一石も食べることがあるのに、飼い主はその力を知らず、ふさわしく飼わないので、力が出ず、並の馬ほどの働きさえできない。それなのに飼い主はむちを手に「天下に馬はいない」と言う。ああ、本当に馬がいないのか。本当は馬を見分けられないのだ。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

世（よ）に①伯楽（はくらく）有（あ）りて、②然（しか）る後（のち）に千里（せんり）の馬（うま）有り。千里の馬は常（つね）に有れども、伯楽は③常には有らず。故（ゆゑ）に名馬（めいば）有りと雖（いへど）も、④祇（た）だ奴隷人（どれいじん）の手（て）に辱（はづかし）められ、槽櫪（さうれき）の間（かん）に⑤駢死（へんし）して、⑥千里を以（もつ）て称（しよう）せられざるなり。

馬の千里なる者（もの）は、一食（いつしよく）に或（ある）いは粟（ぞく）一石（いつせき）を尽（つ）くす。⑦馬を食（か）ふ者は、其（そ）の能（のう）の千里なるを知（し）りて食（か）はざるなり。是（こ）の馬や、千里の能有りと雖も、⑧食（しよく）飽（あ）かざれば、力（ちから）足（た）らず、才（さい）の美（び）外（そと）に⑨見（あらは）れず、⑩且（か）つ常（つね）の馬と等（ひと）しからんと欲（ほつ）するも⑪得（う）べからず、⑫安（いづ）くんぞ其の能の千里なるを求（もと）めんや。

之（これ）を策（むちう）つに⑬其の道（みち）を以てせず、之を食（か）ふに其の材（ざい）を尽くす能（あた）はず、⑭之に鳴（な）けども其の意（い）に通（つう）ずる能はず、策（むち）を執（と）りて之に臨（のぞ）みて曰（い）はく、「天下（てんか）に馬無（な）し」と。嗚呼（ああ）、⑮其（そ）れ真（しん）に馬無きか、其れ真に馬を知らざるなり。

語注　伯楽＝馬のよしあしを見分ける名人。もとは天馬をつかさどる星の名で、のちに馬を見分けるのが上手な人（春秋時代の孫陽）の呼び名になったと伝えられる。千里の馬＝一日に千里も走る名馬。奴隷人＝身分の低い使用人。ここでは馬の世話をする下働きの者。槽櫪＝かいばおけ。転じて馬小屋。駢死＝（並の馬と）首を並べて死ぬこと。粟＝穀物。石＝容積の単位。常の馬＝ふつうの馬。並の馬。策＝むち。また、むちで打つこと。材＝才能。※この文章は韓愈の「雑説」四編のうちの四番目（「雑説四」）で、「馬説」とも呼ばれる。※白文は日本で広く読まれてきた本文によった。中国の本には、「祇」を「只」「祇」「祗」と書くもの、「邪」を「耶」と書くもの、「天下無良馬」のように「良」の字があるもの、終わりの「也」を「邪（耶）」とするものもある。※「馬を食（か）ふ」を「食（やしな）ふ」、「常の馬」を「常馬（じやうば）」、「其の材を尽くす能はず」を「其の材を尽くさしむる能はず」、「世に伯楽有りて、」を「世に伯楽有り、」、「間（かん）」を「間（あひだ）」、「真（しん）に」を「真（まこと）に」と読む本がある。結びの「其れ真に馬を知らざるなり」は、「也」を疑問の「か」と読んで「其れ真に馬を知らざるか」とする教科書もある。お使いの教科書に合わせること。

A　語句の意味と読み（1〜7）

（1）①「伯楽（はくらく）」とは、もともとどのような人のことか。書け。

（2）②「然（しか）る後（のち）に」の意味を書け。

（3）④「祇（た）だ奴隷人（どれいじん）の手（て）に辱（はづかし）められ」の「祇だ」の意味を書け。

（4）⑤「駢死（へんし）して」の意味を書け。

（5）⑦「馬を食（か）ふ者」の「食」の意味を書け。

（6）⑧「食（しよく）飽（あ）かざれば」の「食」の読みを現代仮名遣いで書け。また、⑦の「食」とのちがいがわかるように意味を書け。

（7）⑨「見（あらは）れず」の読みを現代仮名遣いで書け。また、意味も書け。

B　句法（8〜13）

（8）③「常には有らず」は何という句法か。意味も書け。また、語順が逆の「常不有（常に有らず）」とのちがいを書け。

（9）⑩「且（か）つ」の「且」は、別の文では再読文字として使われることがある。再読文字のときの読み方と意味を書け。また、本文の「且つ」の意味を書け。

（10）⑪「得（う）べからず」の白文は「不可得」である。「不可〜」はここではどのような意味を表すか。本文に即した訳もあわせて書け。

（11）⑫「安（いづ）くんぞ其の能の千里なるを求（もと）めんや」の句法を書け。また、「安くんぞ〜んや」の意味を書け。

（12）⑬「其の道（みち）を以てせず」の白文は「不以其道」である。書き下し文にしたがって返り点をつけよ。

（13）⑮「其（そ）れ真（しん）に馬無きか、其れ真に馬を知らざるなり」の直前の「嗚呼（ああ）」は、どのような用法の語か。また、⑮の「無きか」の「か」にあたる白文の字を書き、その用法を書け。

C 主語・指す内容（14〜17）

(14) ⑥「千里を以（もつ）て称（しょう）せられざるなり」の主語を、本文中から二字で抜き出せ。

(15) ⑬「其の道（みち）を以てせず」の「其の道」とは、どのようなやり方のことか。「其」が指すものを明らかにして書け。

(16) ⑭「之に鳴（な）けども」で、鳴いているのは何か。また、その気持ちを理解できないのは誰か。本文中の語で書け。

(17) ⑮「其（そ）れ真（しん）に馬無きか、其れ真に馬を知らざるなり」とあるが、「馬を知らざる」のは誰か。本文中から五字で抜き出せ。

D 口語訳（18〜21）

(18) ③を含む「千里の馬は常に有れども、伯楽は常には有らず。」を口語訳せよ。

(19) ④⑤⑥を含む「故に名馬有りと雖も、祇だ奴隷人の手に辱められ、槽櫪の間に駢死して、千里を以て称せられざるなり。」を口語訳せよ。

(20) ⑩⑪⑫を含む「且つ常の馬と等しからんと欲するも得べからず、安くんぞ其の能の千里なるを求めんや。」を口語訳せよ。

(21) ⑮を含む「嗚呼、其れ真に馬無きか、其れ真に馬を知らざるなり。」を口語訳せよ。

E　内容・記述（22〜25）

（22）②「然（しか）る後（のち）に」とあるが、千里の馬は「常に有」るのに、なぜ作者は「伯楽がいて初めて千里の馬がいる」と言うのか。説明せよ。

（23）①「伯楽（はくらく）」と、本文の「千里の馬」は、それぞれ人間の世界の何をたとえているか。書け。

（24）⑨「見（あらは）れず」とあるが、千里の馬のすぐれた才能が外に現れないのはなぜか。本文の内容にそって説明せよ。

（25）⑮「其（そ）れ真（しん）に馬無きか、其れ真に馬を知らざるなり」で作者が言いたいことを、⑦「馬を食（か）ふ者」が何をたとえているかを明らかにして、五十字以内で書け。

F　文学史・思想（26〜28）

（26）作者韓愈（かんゆ）は何という時代の人か。また、韓愈をふくむ、唐と宋の時代の代表的な文章家八人をまとめて何と呼ぶか。さらに、八人のうち韓愈のほかの唐の人を一人書け。

（27）韓愈が柳宗元とともに進めた、文章の書き方を改めようとする動きを何というか。また、その動きはどのような文章に反対し、どのような文章を手本にしようとしたか。

（28）題名『雑説』の「説」とは、どのような文章のことか。また、同じ韓愈が「説」の形で、学問の師について述べた文章の題名を書け。

【テスト直前チェック】この三つ　❶「常には有らず」は部分否定。「伯楽はいつもいるとは限らない」。「いつもいない」と訳すと即アウト。白文「不常有」の「不」の位置と、書き下し文の「は」が目印。　**❷「安くんぞ〜んや」は反語。**「どうして求められようか、いや、求められない」まで訳す。読みは「食（か）ふ＝飼う」「食（しよく）＝えさ」「見（あらは）る＝現れる」の三つをセットで。　**❸千里の馬＝すぐれた人材、伯楽＝それを見抜く人。**結び「其れ真に馬を知らざるなり」＝名馬がいないのではなく、見分けられないだけ。記述問題の答えはここに集まります。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる